

究極の多様性が がん医療の すき間を埋める

樋野興夫さん

1954年、島根県生まれ。

順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授。がん研究会病理部、米国アインシュタイン医科大学、米国フォックスチャースがんセンター肝臓研究センター、がん研究会実験病理部を経て現職。2008年、順天堂医院に開設した「がん哲学外来」が評判となり、2009年、NPO法人を設立。理事長に就任し、全国に広げる運動を展開している。肝臓がんおよび腎臓がんの研究で、日本がん学会奨励賞、日本実験動物学会賞、がん研究会学術賞、高松宮妃徳研究基金学術賞、「新渡戸・南原基金」第一回「新渡戸・南原賞」などを受賞。著書に「がん哲学新訂版 立花隆氏との対話」、「われorigin of fireたらん:がん哲学余話」、「Cancer Philosophy (がん哲学 英語版)」(以上、to be出版)など。



2008年1月から3月までの間、順天堂大学医学部附属順天堂医院は、医師と患者が対等の立場でがんについて語り合うためのある試みを行った。予想に反して予約が殺到、最終的に55人が相談に訪れた。

名付けて「**がん哲学外来**」。

その後、提唱者である樋野興夫さんを中心に、「がん哲学外来」は院外で再スタートをきった。その活動は全国に広がろうとしている。



「がん哲学外来入門」
樋野興夫著
毎日新聞社 1200円(税別)



「がん哲学外来の話」
樋野興夫著
小学館 1200円(税別)



がん医療のすき間

悩めるがん患者の思いを受け止め、語り合う「がん哲学外来」。「がん」と「哲学」が結びつくとは意味深だが、提唱者は、順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授の樋野興夫さんだ。曰く、「やっている本人にもわかっていないからね(笑)」。「がん哲学」という言葉は樋野さんの造語である。

「時代の流れは、がん相談を病院の外に出す方向に向かっていくようです。院内では十分に相談できないのが現状です。がん患者というのは、症状が重くなるとかえって相談しなくなるものなんですね。ですから、がん哲学外来が、がんの話をつつと自由なスタンスで院外でできるようになるような、そういう方向

のさきがけになればいいと思っています」

少々、説明が必要だろう。あらかじめ断っておかなければならないが、「がん哲学外来」は、その言葉から理解できるように、治療行為ではない。樋野さんが行うのは、がん患者と話をするという、ただそのことである。もちろん、がんについての医学的な知識は必要だから、そういう意味では単なる心理カウンセリングではない。しかし、「がんを治す」行為ではない。それでも樋野さんの所に、続々と患者さんがやってくる。

「がん哲学外来」の2008年の取り組みは好評だった。そこで、樋野さんを中心に医師や看護師、医学生といった医療従事者、講演

や勉強会を通じて知り合った人々、父兄の仲間など趣旨に賛同したさまざまな人たちがスタッフとして院外での外来実現に動き出した。今年2月、NPO法人「がん哲学外来」(※1)を設立している。

※1 NPO法人「がん哲学外来」
2008年暮れから活動し、今年2月にNPO法人として東京都から認可を受ける。横浜(神奈川)、東京留米(東京)、柏(千葉)、新宿(東京・国民健康保険組合の加入者のみ対象)の4拠点には月に一度樋野さんが訪れ、患者本人、あるいは患者とその家族とともに語り合う。面談時間は1組あたり、40分から1時間ほど。予約制で無料。樋野さんの考えに賛同した臨床心理士らが中心となって八戸(青森)が活動を開始している。佐久(長野)、茨城(東京)でも外来開設の動きがある。院外に事務局を設置できるよう、内閣府にも申請する予定。